

モンキチョウ

Colias erate

シロチョウ科



モンキチョウ

名前の由来

翅が黄色で黒い紋があることに由来すると思われる。チョウという言葉はもともと「漢語」から取り入れたものである。漢字名：紋黄蝶

特定種

該当なし。

形態的特徴

紋のある黄色いチョウ。大きさはモンシロチョウ程度。後翅中央上寄りに丸い紋がある。オスは翅の地色が黄色であるが、メスは黄色と白色の2型がある(白いタイプが圧倒的に多い)。斑紋はオスメス同じであるが、性は翅形と腹端の形で識別される。春型は一般に小形で翅表黒縁の発達が悪く、裏面は暗色をおびるが、夏型は大形で黒縁は広く、裏面の色彩は明るい。



モンキチョウ。表 (左がオス、右がメス)

黒い部分が広く、中に白黄色色の紋がある

後翅真ん中に丸い紋がある

類似種と見分け方

モンシロチョウ(モンキチョウの白っぽいタイプと類似)。モンシロチョウは前翅外縁の黒色部に白い紋がない。



モンシロチョウ。表 (左がオス、右がメス)

黒い部分が狭く、中に白色の紋がない



モンキチョウ。ウラ (左がオス、右がメス)



モンキチョウ。メスの黄色型、表 (左が春型、右が夏型)

チョウ標本：吉原利之氏作成・所蔵

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
卵期			■		■		■					
幼虫期	■		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
蛹期	■			■	■	■						
成虫期		■	■	■	■	■	■	■	■			

生育環境・分布

平地の道端から山地にかけてマメ科植物の生える草原。
分布：国外分布は、ロシア極東地域、朝鮮半島、中国大陸中北部。国内分布は、日本全域。北海道内分布は、全

域。
十勝地方では、平地から山間部まで広く分布し普通に見られ、数も多い。

繁殖生態・寿命

年2～3回発生。越冬態は幼虫。
母蝶は明るい草地の比較的背の低い食草を見つけ、前脚で葉をたたき食草を確認すると、すばやく腹部を曲げ、葉裏に1卵産みつける。
孵化した幼虫は葉の表面をなめるように食べ始め、葉の

上に台座を造り静止する。老熟幼虫は葉を離れ茎の上に静止し、葉縁から食べるようになる。蛹化は食草や周囲の植物の茎や葉の裏で行われる。寿命：不明。

他生物との関わり

*幼虫はコマツナギ、クサフジ、ツルフジバカマ、カラスノエンドウ、ミヤコグサ、ムラサキツメクサを食草とする。
*成虫の吸蜜植物はムラサキツメクサやクサフジ、セイヨウタンポポ、ヒメジョオンなどをはじめ多くの種が確認されている。
*亜終齢～終齢幼虫にかけて、コマユバチの一種が出ることが多い。

*スズメやアシナガバチ類に捕食されることもある。
*蛹からは寄生蝇やヒメバチ類が出ることがある。種の同定がされているのはモンキサムライコマユバチ、クロコヤドリバエ、モンキヤドリバエである。

幼虫の食性（食草）

コマツナギ、クサフジ、ツルフジバカマ、カラスノエンドウ、ミヤコグサ、ムラサキツメクサ。



クサフジ。モンキチョウ幼虫の食草の一つ

興味深い話

■モンキチョウのオスは黄色いタイプだけが、メスは白いタイプと黄色いタイプがあり、圧倒的に白いタイプが多い。まれに中間の形質をもったものも出る。この例のようにオスとメスのみかけに違いがあり、しかも一方がいくつかの型に分けられることを「性的多型（せいきてきたい）」という。

■オツネンチョウ（越年蝶）とも呼ばれるが成虫では越冬しない。
■十勝地方のアイヌ語では、モンキチョウを「チロンノマレウレウ」、チョウ類一般を「マレウレウ」という。

配慮事項

人為的環境にも適応性が高い種のため特にならない。

参考文献

「原色蝶類検索図鑑」猪又敏男 北隆館 1990
「日本のチョウ」海野和男・青山潤三 小学館 1981
「原色昆虫大図鑑Ⅰ（蝶蛾編）」北隆館 1978
「北海道昆虫ガイド」北海道昆虫同好会 北海道教育社 1984
「学研生物図鑑 昆虫Ⅰチョウ」監修 白水隆 学習研究社 1983
「十勝の蝶」大和与三追悼集 十勝蝶の会 1993
「北海道の蝶」永盛拓行・永森俊行・坪内純・辻規男 北海道新聞社 1986

「原色日本蝶類生態図鑑（Ⅰ）」福田晴夫・浜栄一 他 保育社 1982
「北見の蝶」木村辰正 北見市教育委員会 1994
「コタン昆虫記（4）チョウ篇」井上寿 十勝地方史研究所 1988
「知里真志保著作集 別巻Ⅰ 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編」知里真志保、平凡社 1976
「アイヌと虫の生活誌」井上寿 釧路アイヌ文化懇話会 2006

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

（在来種）花

（外来種）花

哺乳類

（水辺）鳥類

（草原・樹林）鳥類